テレビで見たことのある映像がたくさん出てくるが，一過性のものよりも，じっくり詳しく見られるという点では，こういう本になっている方がずっとよい．テーマは旅をする植物たち，植物の養分調達システム，花たちの花粉輸送大作戦，植物たちの生き残り戦術，植物たちの多彩な交遊録，極限の世界を生き抜く植物たちで，それぞれ魅力的な物語りが組まれている．植物たちといっても，それと付き合いのある動物たちや環境とのかかわりに大きな部分が割かれていて，自然を植物とか動物とかで割り切って見ることはできないということを理解させる．教育現場の教材つくりに絶好である．一部，擬人的なところや目的論的なところが気にならないではないが，これは利用者の素養次第だろう．

(金井弘夫)

□清水建美（監修），長野県植物誌編集委員会（編）：**長野県植物誌** 1735 pp.1997．信濃毎日新聞社．¥23,000.

長らく懸案になっていた長野県植物誌がようやく出版された．長野県は南北に長くて両端の植物はかなり異なり，また北アルプス，南アルプスの大きな山脈を抱えているので，その解明にはかなりの努力を伴う．ただ日本の中心をなす広い地域だけに，纏まった植物誌がだされることが要望されていた．それがようやく満たされたわけである．

内容は自然環境，植物研究史に続いて本題である植物相があり，最後に長野県の植物地理と天然記念物が載せられている．植物相では藻類でよく見られる植物，ミズゴケ類が始めに載せられているが，大部分はシダ類，裸子植物，被子植物の解説である．それぞれの科でよく見かける種類は解剖図が添えられ，一部のものには分布図がのせられている．複数の種類を持つ属では検索表がつけられている．一部には新学名があって末尾に記載が載せられている．大体は新しい文献も調べて，正しい学名のもとに記述されているが，執筆者によって差があり，古い学名をそのまま使用しているなど，内容に精粗が見受けられる．又各科の終わりに未確認の書類がリストされている．その一部は標本を調べれば解決するものと思うし，それ以外のものも整理する必要がある．ウルップソウの所属するGlobulariaceaeの位置に関して，充分な研究もなく，勝手なことを言われるのは迷惑である．この植物誌は県内の植物研究の出発点であり，今後の研究でそれらの不十分なことを正してもらいたい．

(山崎　敬)

□Dewick P. M.: **Medicinal Natural Products — A Biosynthetic Approach** 447pp. John Wiley & Sons, Chichester, U. K.

本書は本来薬科大学の学生を対象に書かれた生薬学，天然物化学の教科書であるが，薬用天然物質に興味を持つ研究者にとっても，必要事項を要領よくまとめてあって参考となろう．本書の冒頭に著書は本書の目的，項目，学習，理解の仕方を示している．本書の記述の対象は植物成分と主として抗生物質として取扱われる菌類代謝産物など所謂る第二次代謝産物と称せられるものである．それらの配列は最近よく採られている生合成経路による分類－酢酸・マロン酸経路（脂肪酸およびポリケチド），シキミ酸経路（芳香族アミノ酸およびフェニルフロパノイド），メバロン酸経路（テルペノイド，ステロイド），アミノ酸起源のアルカロイド，ペプチド，蛋白質，および炭水化物－によっている．各論の記述に先立ってこれらの生合成の基本的有機化学反応－アルキル化，Wagner-Meerwein 転位，アルドール－Claisen 反応，Schiff 塩基形成，Mannich 反応，アミノ基転位，脱炭酸反応，酸化・還元反応，フェノール酸化縮合，グリコシル化－等が分かり易く解説されている．現在までに知られている膨大な数に上る天然物質の中，代表的なものを選んでそれぞれの生合成機構および化学構造を示しながら記述してある．またその中でトピック的なものについては特に囲みの中で詳述して読者の理解に資している．

本書を通読することにより読者は第二次代謝産物について概観を把握すると共に，それぞれの代表的なものについては最新の正確な知識を得ることができるものと思われる．

(柴田承二)